



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の対称表現の社会語用論的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	都, 賢娥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15213号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87165
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hyunah_Toh_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 都 賢 娥

主査 教授 加藤重広
審査委員 副査 教授 李連珠
副査 教授 竹内修一

学位論文題名

日本語の対称表現の社会語用論的研究

当該領域における本論文の研究成果

本論文は、日本語における対称詞を含む対称表現について、社会語用論の枠組みで分析した研究の成果である。対称表現の研究は、これまで代名詞の語誌として扱われることが多く、実際のコミュニケーションにおける選択と選択動機に踏み込んだ研究は十分になされていないこと、ポライトネスとインポライトネス、スタンスの区分、対称表現に拡張した詳細な下位区分とカテゴリー設定など、新しい対称表現の研究だとみることができる。

第一部の予備的議論で行った対称表現の定義と分類は、先行研究における不備を踏まえて、一般言語学的な定義としても成立するものとして提案されており、対称詞などの代名詞表現に加えて、固有名詞と普通名詞、また、空間指示詞を下位カテゴリーとしている点も研究の枠組みとして今後活用できるものになっている。対称表現に附属する形式を、敬称・肩書きなどを表す普通名詞（肩書）・複数の意味を表す成分に分けて細かに論じている点、対称表現が同一のまま変更されないのではなく、カテゴリーをまたいで変更されるケースが見られることを指摘し、カテゴリー転換として掘り下げて分析している点も重要な成果と言える。固有名詞と敬称の組み合わせ、固有名詞と職位・役割などの普通名詞の組み合わせについても細かに観察し、タイプ別の分析がなされている。

対称詞の選択動機を論じた第二部では、話者のコントロールの可能性の観点から外的要因と内的要因に分けて分析しているが、この区分は、やや荒削りなところがあるものの、独自に提案されたものでその新規性と有効性は評価できる。対称詞の一般的な選択に強く関わるものは外的要因だとしているが、このことは規範上選択すべき対称詞が機械的に決められる可能性を示唆している。内的要因が強い動機として働けば、それが外的要因を上回って関与する可能性を指摘したことは重要な成果である。対称詞の中で選択のため考慮すべき要因が最も複雑な「あなた」を中軸に据えて分析した点は賢明な判断だが、あえて対称詞の使用を避けるケースも含めて分析をしていたとしたら、さらに分析の深みが増したとも思われる。対称詞選択を文脈種別の関係から論じ、形式だけで個人を特定できない対称詞が、形式文脈と状況文脈を参照して聴者を特定できること、聴者の解釈までに参照される文脈が最も多いものは普通名詞であること、定性を有する固有名詞は形式文脈と知識文脈の参照により指示が確定する点で普通名詞と異なること、が指摘された点は新しい成果である。

デュ・ボワによるスタンス理論の概念を利用して認識と情緒のスタンスの複合類型を4種類立てて分析しているが、これは対称詞の選択動機以外にも拡張できるもので、今後の言語研究を発展させる可能性を秘めている。対称詞の選択動機として上下関係が共通の要素であるが、話者のスタンス表示と距離調整が深く関与することを明らかにした点も重要な成果である。

対称表現の発話効果を広範に観察し、分析を加えた第三部では、「あなた」が距離を置いて冷静で冷淡な印象を与える役割性を帯びるが、ジェンダーよりも年齢が選択に強く作用すること、「あんた」

に比して話者の品位や品格を保持するために選択されることなどを指摘し、キャラクター形成に用いられるとした。対称詞がインポライトネス解釈を強化・確定させる手段として機能するとした分析も社会語用論的には新しい成果であると認められる。

さらに、カテゴリー転換の発話効果と対称表現の選択動機について、話者と聴者の「縦」の距離の調整が可能な「動的調整」だと主張している点は、重要な指摘である。遠隔化・近接化は、これまで縦関係や横関係の区分を超えたものとして論じられることが多かったことを踏まえ、今後新しい研究の局面を拓く可能性を秘めており、分析の精緻化と発展の余地がある。

学位授与に関する委員会の所見

本論文は、対称表現を論じた研究として、新しい提案、創見をいくつも含む、新しい社会語用論の研究成果と認められる。特に、インポライトネスとの関係を扱った分析やスタンスの観点からの研究は、これまでの研究では見られなかったもので、新しい研究の射程を切り拓くものとして評価できる。微妙な表現の使い分けとその背後に潜む表現意図や選択動機、聴者の解釈のずれなどを深く細かに分析している点は、非母語話者による分析であることを除外しても、高い評価に値するだろう。

論述の構成方法について改善の余地があること、表層に現れない対称詞や対称表現の扱いについてさらに掘り下げる可能性があること、説明記述をわかりやすくする余地があること、なども審査委員会では指摘されたが、これは評価に関わる重大な瑕疵とは言えない。国際学会や全国学会での発表やそれを踏まえた論文などを積み上げていることも踏まえ、審査委員会として全員一致して、博士（文学）の授与が妥当だと結論したものである。